

酒井多賀志

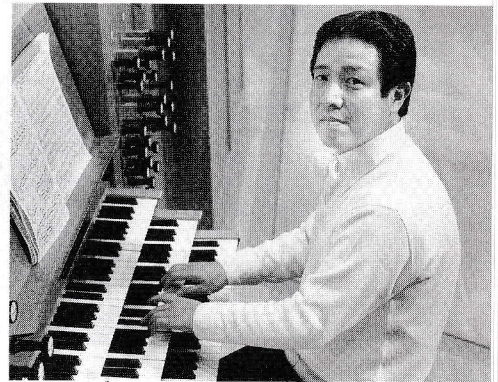
パイプオルガンで

オリジナルを作曲する喜び

J・S・バッハの有名な「トッカータとフーガニ短調」にあこがれてオルガニストになった私ですが、いつの頃からか、教会やコンサートでオルガンを弾いていて、「何かが違う」「何か足りない」という感じを抱き始めました。その何かを追求するために一九八一年から自作自演を始めたわけですが、この道に入ってからちょうど十年たった今日、その「何か」が、やっと見えてきたように思います。

日本人にとってヨーロッパ音楽、中でもオルガン音楽は、客観的視点からの三人称表現は申し分ないので、二人称的な「あなた」を感じさせる暖かいぬくもりの表現がまったくありません。また、俳句や短歌にも必ず登場する四季の情感というのも稀薄です。この二つの欠如が、オルガン音楽を一般の日本人から遠ざけている最大の理由ではないでしょうか。

オルガン音楽は、ヨーロッパにおいて「神の家」である教会の中で、普遍的なもの、永遠なるものをめざして数百年かけて発達して



きました。ですから、うつろいやすい二人称的表現や、自然の四季といったものは、オルガン音楽からは、意識的に除外されてきたとしても不思議ではありません。しかし、そうした日本の要素も実際のオルガン音楽の中にとり入れてみると、驚くほど自然に溶けこんでゆくのです。あたかも数百年の渇きを一気に癒すかのような感じさえします。かつて神の偉大さ、権威、愛を表現するためにのみ存在していたオルガンが、私の作品では、四季に彩られた大自然のおおらかな力強さ、きびしさ、やさしさといった情感を語っています。私のオリジナル作品の中では、自然との対話を通して自分自身を見い出そうとする日本人の心の営みを描いた『光と風と波の心象』op.3と芭蕉の辞世の句「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」をイメージして作曲した『流離』の二曲が現在最も気に入っています。これらを通して、ヨーロッパのオルガン音楽と私自

身の間にある溝は、埋まりつつあると感じています。

一九八七年以降は、さらなる新しい道を発見しました。それはオルガンと邦楽器のアンサンブルの可能性です。現在、尺八と箏のアンサンブルに惹かれています。オルガンのみで日本の自然の美を孤独に表現していた私にとっては、その出合いは、まさに最適の仲間を見つけた思いでした。雄大で広々とした大自然を想わせるようなオルガンのサウンドに乗って鳥や蝶が舞うごとく優雅に躍動する邦楽器の美しさは、今まで聞いたこともないほど新鮮で、また、信じられないほど自然にスムーズに調和しています。

オルガンと邦楽器は、誰でも知っている通り、それぞれまったく異なった精神的風土を背景に発達してきたわけですが、そのまったく異なったものが、かえって新鮮なアンサンブルを生むのです。西欧も日本も、それ自身の文化の中では、あらゆる要素が煮つまっており、お互い自分とは正反対の要素を求め合っているのが現代であるといえましょう。

私は、このアンサンブルのための作品を、今後も数多く作曲してゆくつもりです。そして、一つの新しいジャンルを形成できればと、念じている今日、この頃です。

*筆者オリジナル作品のCDが昨年十一月、発売されました。(流離)ASURAI:TECLA:FPD 009)
(さかい・たかし)カトリック吉祥寺教会オルガニスト、東京純心女子短大講師